

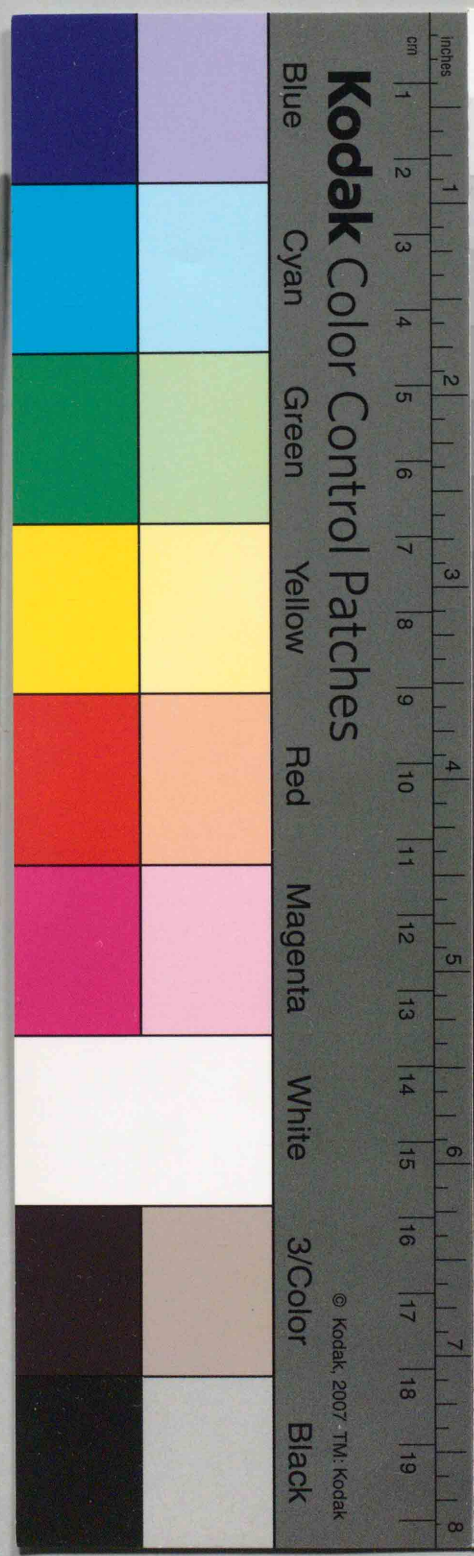


3759
M614
資料室

たかみよ

000

やいばん



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007. TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007. TM: Kodak

43126
教科書文庫
4
810
33-1941
2000.30.2319



よみかた



よみかた

資料室

3789

M200



二十六	うらしま太郎	九十七
二十五	日曜日の朝	九十四
二十四	長い道	九十二
二十三	自動車	八十七
二十二	うさぎとたぬき	八十一
二十一	子馬	七十九
二十	海	七十四
十九	きりぎりす	六十九
十八	お祭	六十六
十七	花火	六十四
十六	金魚	五十九
十五	つゆ	五十六
十四	一寸ぼふし	五十一
十三	川	四十四



十二	ねずみのち急	四十二
十一	むしば	三十九
十	お話	三十七
九	軍かん	三十一
八	蛙	二十七
七	ささ舟	二十三
六	牛わか丸	十九
五	鯉のぼり	十八
四	二重橋	十六
三	国引き	十二
二	らくかさん	七
一	春	四

もくろく



一 春

二年生

うれしい、うれしい、

二年生、

春だ、春だど、

小鳥が うたふ。

うれしい、うれしい、

二年生、

さくら、さくらだ、

野山は花だ。



花まつり

すみれ、たんぽぽ、れんげ草、

花のおやねが美しい。

あま茶の中からひよっこりと、



お出になつたか、おしゃかさま。

天上天下をゆびさして、

お立ちになつて、いらつしやる。

小さなひしゃくでお茶くんで、

かけてあげましょ、おしゃかさま。

てふも小鳥もたのしさう、

今日はあなたの花まつり。



二 らくかさん

勇さんと正男さんが、かみでらくかさんをこしらへました。

「さあ、野原へ行つてとばさう。」

二人は、それを持って出かけました。

勇さんが、らくかさんをたたんで、いとをくるくるまいて、それを空へ向かつてカいっぱいなげました。すると、開かないでそのまま落ちて来ました。

「おもりがかるいのだね。」

と、勇さんがいひました。

「こんどは、ぼくのをとばすよ。」

と、いって、正男さんが、同じやうに空へなげました。

開くには開きましたが、すぐに落ちて来ました。

「これは重すぎる。」

と、正男さんがいひました。

二人は、よささうな石をあちこちとさがしました。

そこへ、春枝さんが、犬をつれてあそびに来ました。

「何をさがしていらっしゃるの。」

「らくかさんにつける石を、さがしてゐるのです。」

と、勇さんがいひました。

「ちや、これはどうでせう。」

と 行って、春枝さんはガラス玉を二つ 見せました。

「これなら、ちやうど いいかも しれない。」

それをおもりに つけかへてから、勇さんが あげて
みました。すると、らくかさんは ぱつと 開いて、ふは
り、ふはりと 落ちて 来ました。

「うまい、うまい。」

こんどは、二人で いっしょに あげました。

「一、二の、三。」で、たかく あげると、どちらも ぱつと
開きました。

ちやうど その時、南の方から
風が 吹いて 来て、らくかさん
が 吹きあげられました。さう
して、どンドン 北の方へ と
ばされて 行きました。勇さん



も正男さんも、そのあとをおって行きました。

「やあ、らくかさんぶたいだ。すすめ、すすめ。」

と、てんでに大きなこゑでいふと、犬もわんわんとほえて、まつさきに走って行きました。

「ぐんよう犬もどつげきです。」

と、いって、春枝さんもついて行きました。

らくかさんは、草の中へしづかに落ちました。

三 國引き

大昔のことです。

神さまが、國を廣くしたいとお考へになりました。

神さまは、海の上をお見わたしになりました。東

の方のとほい、とほい、ところに、あまった土地のあ

るのが見えました。

神さまは、その土地に太いつなを掛けて、ありつ

たけの力を出して、お引きになりました。

「こつちへ来い、えんやらや。」

こつちへ来い、えんやらや。」



かけごゑ 勇ましく お引きになり
 ました。その土地が動きだして、
 大きな舟のやうに、ぐんぐんとこっ
 ちへやって 來ました。

神さまは、その土地をつぎあは
 して、國を廣くなさいました。

神さまは、また海の上をお見わ
 たしになりました。

こんどは、西の方のとほい、とほ
 い ところに、あまった土地の ある
 のが見えました。

神さまは、それにつなをかけて、

「こつちへ來い、えんやらや。

こつちへ來い、えんやらや。」

と、力いっぱい お引きになりました。これも大きな
 舟のやうに動いて、こつちへやって 來ました。

神さまは、かうして 國を廣くなさつたと いふこと
 です。

四 二重橋

目の前に をがむ 二重橋、
けだかい、美しい 二重橋。

おほりの水は しづかに 明かるく、
白い やぐらは くつきりと そびえ、
しげった松の間に、

おやねが かうがうしく 見えます。

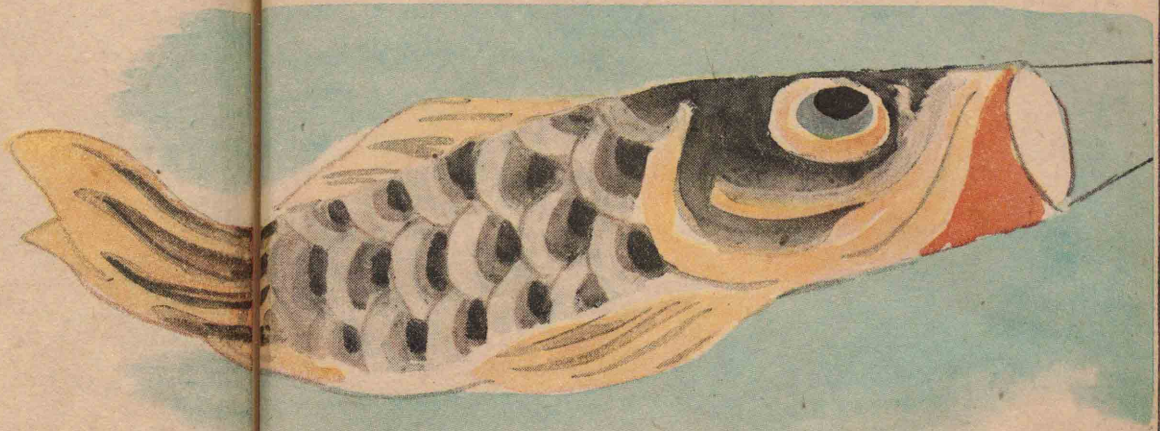
さくさくと 小じやりを ふんで、

女学校の せいとさんが 来ました。

きちんと 並んで、さ いけいれいをして、

こゑを そろへて 「君が代」を 歌ひました。

私たちも、いっしょに 歌ひました。



五 鯉のぼり

ゆうべの雨がはれて、日が
氣持よくてつてゐます。

さをの先の矢車がからか
らとなると、鯉が、大きな口で
思ふぞんぶん風をのんで、や
ねよりもたかく尾をあげます。
尾をおろして来てさをに

つけるかと思ふと、またはら
をふくらましてをどりあがり
ます。

そのたびに、鯉のかげが地の
上をおよぎます。

六 牛わか丸

月のよいばんでした。

牛わか丸が、ふえを吹きながらあるいてみました。

五でうの橋に來ますと、

「待て。」

といふものがあります。

見ると、大きななぎなたを持った大男が立っています。

牛わか丸は、

「だれだ。何の用か。」

といひました。

「べんけいだ。その刀がもらひたい。よい刀を



千本あつめるつもりで、九百九十九本は取った。もう一本で千本だ。さあ、刀を出せ。」

牛わか丸は びくともしません。

「刀がほしいか。ほしいければ取ってみよ。」

といひました。

べんけいは、なぎなたをふりまはして切ってかか
りました。

牛わか丸は、ひらりとらんかんの上へ とびあがり
ました。

べんけいが 上を切ると、牛わか丸は 下へ とびお
ります。右を切ると 左へ とびのき、左を切ると 右
へ とびのきます。べんけいは、へとへとに つかれて
しまひました。

その時、牛わか丸は、あふぎで べんけいの うでを
たたきました。べんけいは、大きな なぎなたを がら
りと落しました。

べんけいは かうさんして、牛わか丸の けらいにな
りました。

七 ささ舟

春の 日が、あたたかく 野原の 草を てらして みま
す。小川の 水が、たのしさうに 流れて 行きます。小

鳥が、木の上で歌を歌ってゐます。
太郎さんは、ねえさんや弟たちと、ささの葉を取って、ささ舟を作りました。

「みんなで、ささ舟のきやうさうをさせよう。ねえさんは、あの橋の上でしんばんをしてください。」

と、太郎さんがいひました。



次郎さんも 三郎さんも よろこんで、めいめいのささ舟を持って、小川の岸に並びました。
みよ子さんは、ささの小枝を持って、橋の上に立ちました。
「よいい、どん。」
三人は、いっしょに舟を出しました。舟は、すべるやうに流れて行きます。



三人は、舟と並んで川のふちを走って行きます。草の葉に止ってゐたてふてふが、おどろいてとび立ちました。

てふてふが、三郎さんの舟に止りました。

舟は、だんだん橋へ近づきます。

「ほうら、もうちきだ。」

と、三郎さんがいひました。

みよ子さんは、さつとささの小枝をふりあげて、

「三郎さん、一ちやく。」

といひました。

「三郎さん、ばんざい。」

と、太郎さんと次郎さんがいひました。

「三郎さんの舟には、てふてふのせんどろさんがのつ

たから、かつたのでせう。」

と、みよ子さんがいひました。

八 蛙

蛙の子どもが、川ばたで遊んでゐました。

そこへ牛が来て、水をのみました。子蛙は、びつくりしてうちへかへりました。

おとうさん蛙とおかあさん

蛙に、

「大きな、大きなばけものが、

水をのみに来ましたよ。」

と、いひました。

きんじよに、また大蛙が、それを聞いて、

「その大きなばけものは、わたしくらゐもあつたか

ね。」

と、いひました。

子蛙は、

「どうして、どうして、今まで見たこともないほど

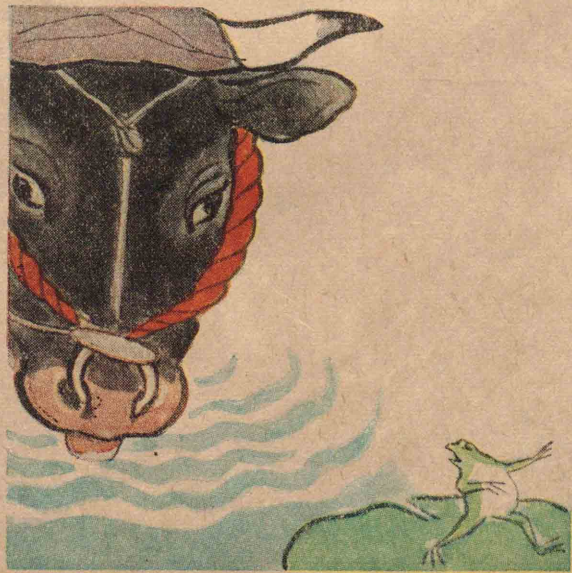
大きいのです。」

と答へました。

大きなのが、じまんの大蛙は、うんといきを吸ひ

こんで、おなかをふくらましました。

「そんなら、このくらゐもあつたかね。」



「とても、そんなものではありません。」

「では、このくらゐかね。」

と、いって、大蛙は、いっそう、ふくらましました。

子蛙は、

「をぢさん、およしなさい。どんなにおなかを、ふくらまして、も、かなひませんよ。」

と、いひました。



しかし、大蛙は、こんどこそと、カいっばい、いきを吸ひこみました。おなかは、まるで、ふうせん玉のやうにふくれました。

すると、「ぼん」と大きな音がして、大蛙のおなか、がやぶれて、しまひました。

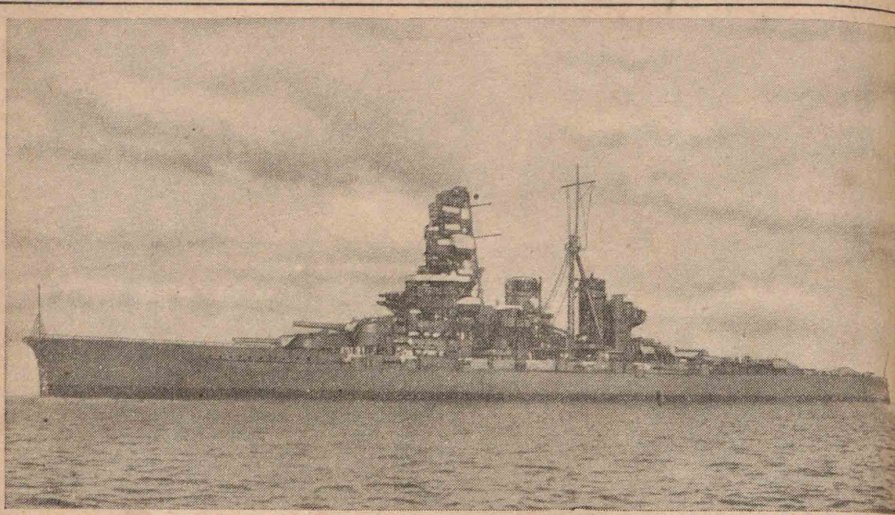
九 軍かん

春雄さんは、軍かんが大すきです。まだ、ほんたうの軍かんを見たことはありませんが、をぢさんに

もらった点を見たり、をぢさんのお話を聞いたりして、軍かんのことはよく知ってゐます。をぢさんは海軍の軍人さんです。

春雄さんは、せんかんや、じゅんやうかんや、くちくかんや、せんすゐかんなどのことをよく知ってゐます。春雄さんにせんかんのことを聞くと、かう答へます。

「せんかんは、一ばん大きくて、一ばんがっしりした軍かんです。まるで、海にうかんだお城のやう



です。大きな大砲がいくつもあつて、てきの軍かんをどしどしうちます。ぼくは、せんかんが大すきです。」

かういったあとで、きつと、「でも、じゅんやうかんはゆくわいな軍かんですよ、せんかんよりもずっと早く走れて、形がすつきりしてゐて。ぼくは、

あれにのって、せかい中の海をのりまはしてみたい。」
といひます。

「一ばん早いのは、じゅんやうかんですか。」

とたづねますと、

「いいえ、それはくちくかんです。小さくて、かるくて、ぐんぐん走ります。小さいくせ。」

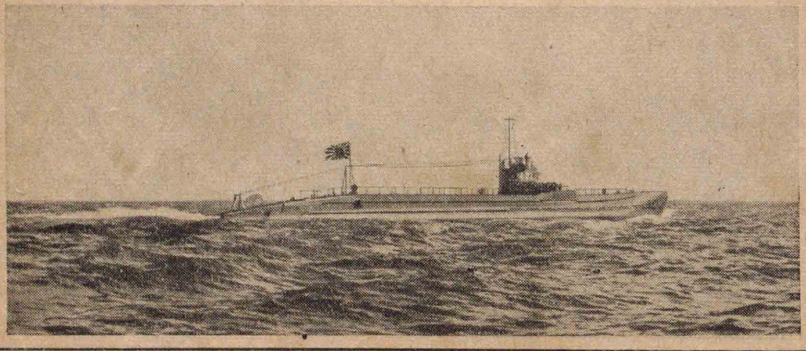
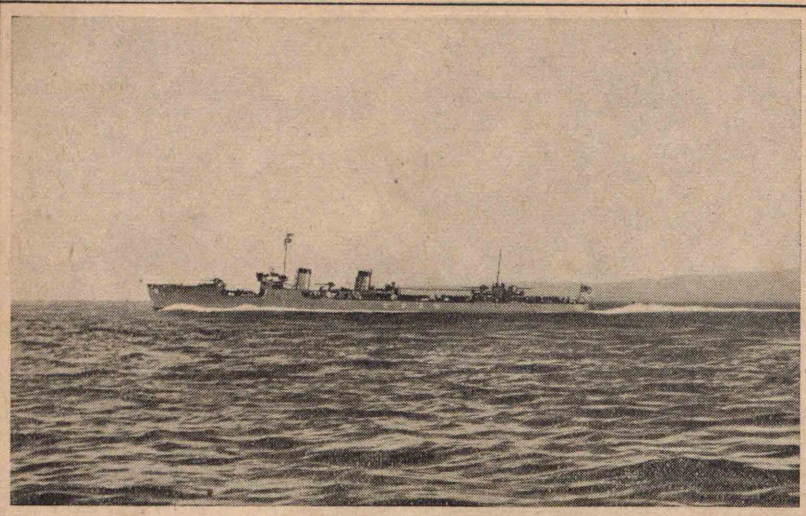
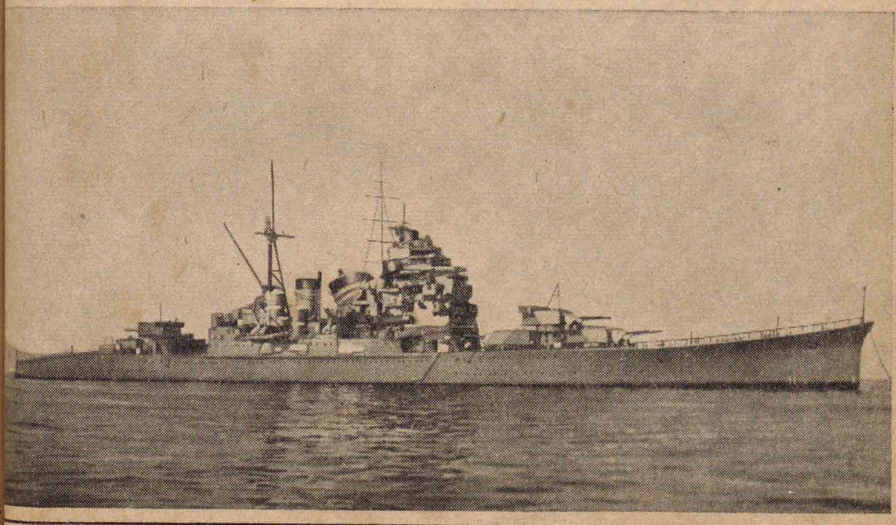
にぎよらいで、大きな軍かんをやっつけます。」

と答へます。

「もつとかはったのはありませんか。」

と聞きますと、

「それは、せんすゐかんとかうくうぼかんです。せんすゐかンは、魚。」



のやうに海の中へもぐります。かうくうぼかんは、廣いかんぱんから、ひかうきをいくつもいくつも

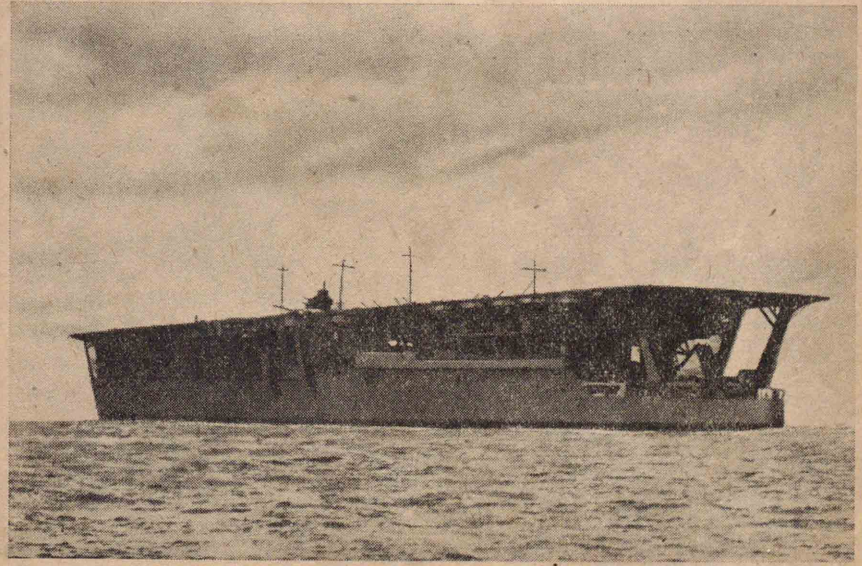
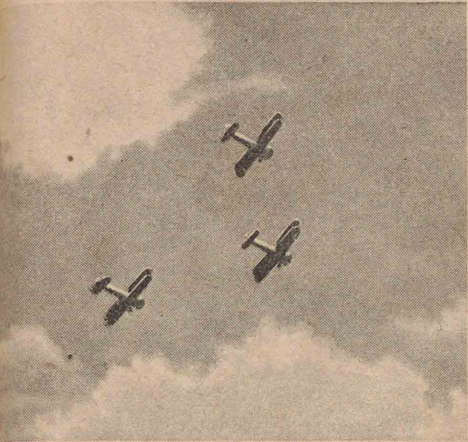
とばしま

す。

と答へます。

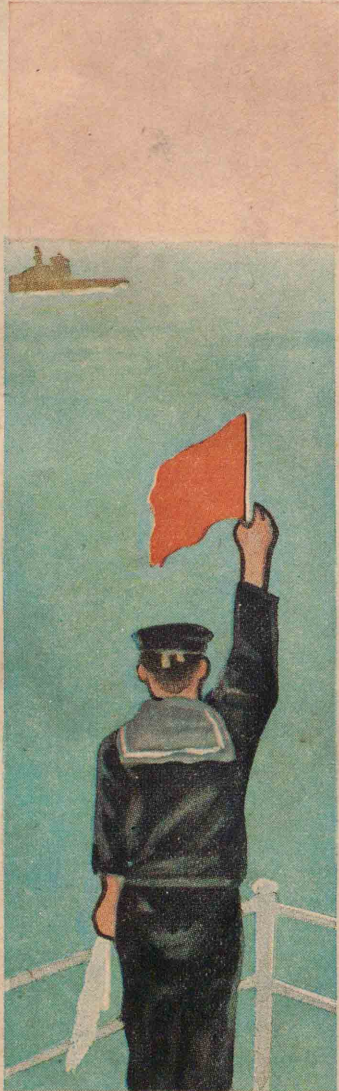
春雄さん

は、をちさん



のやうに、海軍の軍人さんになるといってゐます。

十 お話



水兵さんは旗持って、
ぱたぱたぱたぱた、
お話します。

かうくうぼかんはでんとうで、
ぴかぴかぴかぴか、

お話します。

でんしんたいの兵たいさんは、
かちかちかちかち、

お話します。

うちの赤ちゃん大ご急で、

ああああ、ああああ、

お話します。

十一 むしば

花子さんは、はが痛いので、ひとばん中苦しみました。朝になっても、まだ痛いのがなほりません。花子さんは、おかあさんと、いっしょには、の、おいしゃさまへ行きました。

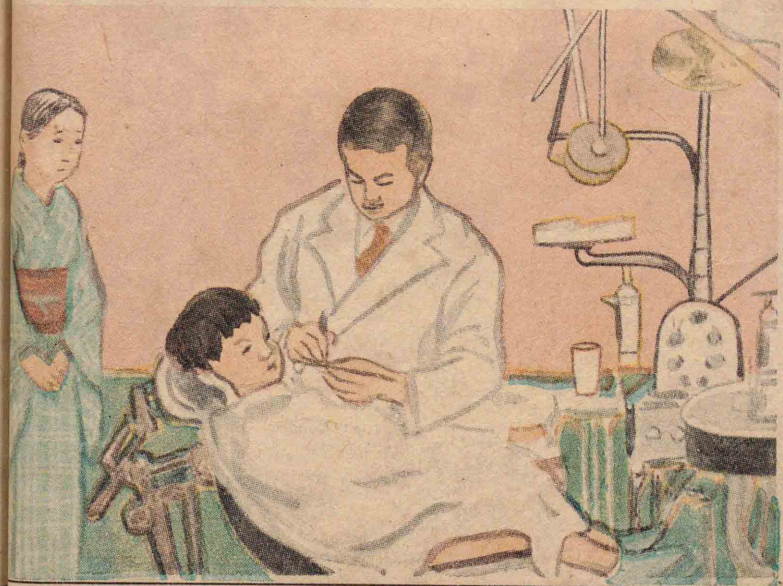
おいしゃさまは、すぐ見てくださいました。

「やあ、二本並んでむしばができてゐる。おくわしをたべすぎましたね。」

と、いって、くすりで洗ったり、くすりを つけたりして くださいました。

花子さんは、痛いのが少しなほったやうに 思ひました。

おいしゃさまは、おかあさんに、



「この、前の 方の むしばは、生えか はる は ですけど、おくの 方のは、一生使ふ だいじな は ですよ。それが、かう むしばになつては いけませんね。」

とおっしゃいました。

それから、
「花子さん、あなたは は を み が きますか。」
とお聞きになりました。

「毎朝 み が きます。」

と、花子さんは 答へました。おいしゃさまは、

「夜ねる前にも、みがくといいのですがね。さうすると、こんなにはがわるくならないでせう。」とおっしゃいました。

おかあさんと いっしょに、おいしゃさまの おうちを出た時、花子さんは、もうはの痛みを忘れてにこにこして あました。

十二 ねずみの ちゑ

「このごろ、なかまのものが、ねこに取られてこまる。なんとかして取られないくふうはあるまいか。」

と、年よりのねずみが、なかまのものに いひました。

一ぴきの若いねずみが、前へ出て いひました。

「大きなすずをねこの首につけて、その音が聞えたら、逃げることにしようではあり」



ませんか。

「なるほど、よいくふうだ。」

と、いって、みんなはかんしんしました。

年よりのねずみがいひました。

「それもよいが、だれが、そのすずをつけに行くのかね。」

みんなはだまってしまひました。

十三 川

正男さんの家の前に、川があります。いつも、きれいな水が流れてゐます。正男さんは、この川で池を作ったり、魚をすくったりして遊びます。

正男さんは、このごろ、「いったい、この川の水はどこから来て、どこへ行くのだらう。これほどたくさん、この水が流れて、それでよくなくならないものだ。」と考へるやう



になりました。

ある日、にいさんにこのことを聞いてみました。
にいさんは、

「川は、遠い山から流れて来て、海へ行くんだ。」
といひました。

「どうして、水はなくならないのでせう。」

「ときどき、雨がふるからさ。」

「そんなら、海は水でいっぱいになって、こぼれませ
んか。」

「海は、広いよ。こんな川が何百流れこんでも、へい

きだ。」

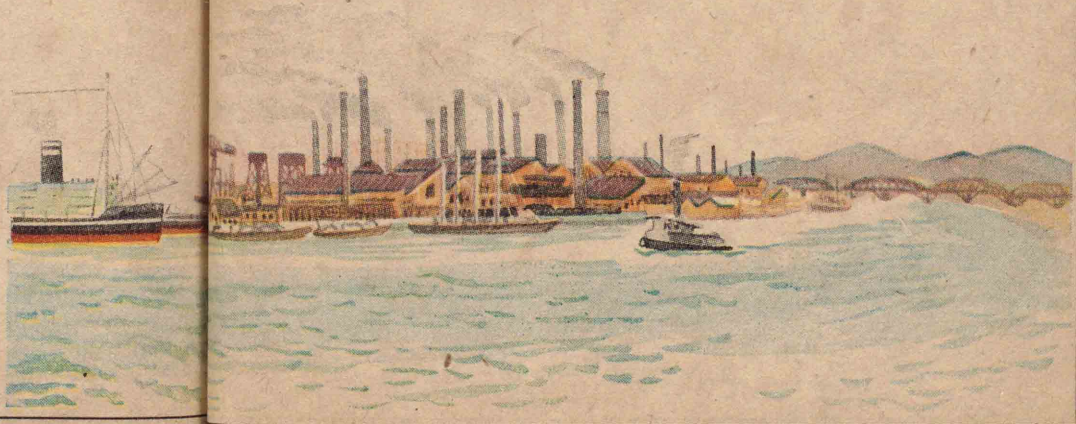
と、いって、にいさんは笑ひました。

正男さんは、まだよくわかりま
せん。それで、おとうさんに同じ
ことを聞きました。

「それは、にいさんのいふとほり
だよ。この川をずっとのぼって
行くと、山と山が近よって、せま



い谷になる。その谷のおくか
 ら、流れて来るのだが、そのへ
 んでは、小さな谷川だ。また
 この川を、だんだんくだつて
 行くと、大川になって、おしまひ
 には、廣い、廣い海へ出る。おま
 へも、いまにその山や海へ行つ
 てみると、よくわかるだらう。
 とおっしゃいました。



正男さんは、少しわかったやう
 に思ひました。けれども、考へ
 てみると、水がいつも流れて
 なくならないのがふ
 しぎでした。

こんどは、そのことをおぢい
 さんに聞いてみま
 した。

「ほう、よいところへ気が
 つきました。山には木
 があるね、草もあるね。雨が
 ふると、水は、木の
 根や、草や、落葉の間にた
 まったり、地めんへしみ

こんだりして、少しづつ 山から 谷へ、谷から 川へ
 とつたはって 流れる。その 水が まだ なくならな
 いうちに、次の 雨が ふる。それは、ちやうど おぢい
 さんの げんきな 間に、おとうさんが 生まれる、お
 とうさんの げんきな 間に、おまへたちが 生まれ
 る、それで、この うちが つづいて いくのと同じこ
 とだ。
 と、おぢいさんは おっしゃいました。

十四 一寸ぼふし

一

一寸ぼふしは、都へ 行って、りっ
 ぱな さむらひに ならうと 考へ
 ました。

そこで、針の 刀を こしに さし
 て、おわんの 舟に のり、はしの
 かいで、こぎながら、川を のぼって
 行きました。





二

都について、どのさまのけら
いになりました。

ある日、おひめさまのおともを
して、たびに出かけました。する
と、おにが出て来て、おひめさま
をたべようとしました。一寸ぼ
ふしは、針の刀をぬいて、おに
に向かひました。

三

おには、一寸ぼふしをつまんで、
一口にのんでしまひました。一
寸ぼふしは、おにのおなかの中
を、針の刀でちくりちくりと
つつきました。おには、

「痛い、痛い。」
と、いひました。





一寸ぼふしは、おにのおなかの中からのどへのぼり、鼻を通つて目へ出て来ました。目から地めんへとびおりました。

おには、おなかものども、鼻も、目も痛いので、あわてて逃げだしました。その時、だいじなうち出の小づちをおき忘れて行きました。

四

五

うち出の小づちをふると、一寸ぼふしは、せいがだんだん高くなりしました。さうして、だれにもまけない、りっぱなさむらひになりました。



十五 つゆ



つゆになって、毎日のやうに雨が
がふります。

二日も三日もふりつづくどげ
んきな太郎さんも、「いやだなあ。」
と思ひます。でも、ときどき雨が

やんで、空が明かるくなり、かつと強い日
がさして來ます。庭のあぢさゐの花が、
ほんたうにきれ

いです。梅の實が、黄色
くなりました。

今、田うゑのさい中で
す。二十センチぐらゐに
のびたいねの苗を、田に
きちんとうゑるのです。

「つゆの雨がふるので、
田うゑができるのだ。」
おぢいさんが、よくかう



おっしゃいます。

小川の 水が、ふえて、音を たてて 流れます。太郎さんは、はれまに 小川で どちゃうを すくひます。

「おぢいさん、つゆは いつまで つづくのですか。」

「七月のはじめまでだね。つゆが あけると、からりと した 夏が 来るよ。」

「夏」と聞くと、太郎さんは、急に、うれしく なりました。せみがなく、水遊びが できる、それよりも、今年 は 海へ つれて 行って もらへる。海、海、早く 海へ 行きたい と思ひました。

十六 金魚



一

ねえさんと 二人で、金魚を買ひに 行きました。店には、大きな 水をけが あつて、その 中に、金魚が たくさん およいで めました。

「正男さん、どれに しませう。」

と、ねえさんが いひますと、金魚やさんが、

「さ、これで すきなのを、おすくひなさい。」

と、いって、小さなあみを かして くれました。

ぼくは それを 持って、じつと 金魚を 見ました。どれも どれも、かは いくて きれいです。

「どうしたの。早く おきめなさいよ。」

と、ねえさんが いひました。

「どれに しようか。みんな きれいだな。」

と、ぼくが いったので、金魚やさんが 笑ひました。

赤いのを 三びき、赤白の ぶちを 二びき すくって、

ガラスばちに入れました。

「これを 少し あげませう。」

金魚やさんは、もを ガラスばちの中へ 入れて くれました。

みどりの もは、しづかに 開きました。

「ぼくが、持って かへるよ。」

ガラスばちを、両手に しっかり 持って、ぼくは そろそ

ろとあるきだしました。

二

うちへかへると、おかあさんが、

「きれいな金魚ですね。」

と、いって、だいを、持って来て、くださいました。

ぼくは、その、だいの、上に、そつと、ガラスばちを

のせました。

おとうさんが、

「これは、涼しきうだ。」

とおっしゃいました。

金魚は、やつとおちついたといふやうに、しばらくじつとして、みました。そのうちに、およぎだしました。もの間をおよぎぬけたり、上の方へ浮かんで行ったり、下の方へななめに沈んだりしました。時には、花びらのやうにひろがって、大きく見えたり、

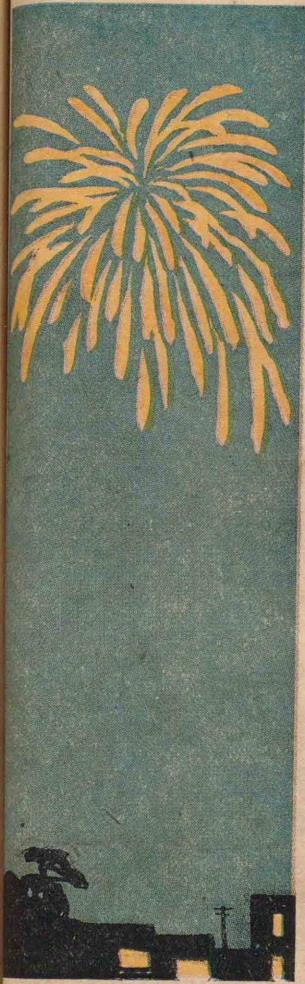


ほそ長く なって 見えたりしました。

ねえさんが、

「正男さんは、金魚とにらめっこをして みるのね。」
と 行って、笑ひました。

十七 花火



どんと なった。

花火 だ、

きれい だ。

空 っ ぱい に

ひろ がつ た。

し だ れ や な ぎ が

ひろ がつ た。

ど ン と な っ た。

何十、何百、

赤い星、

一どにかはって

青い星、

も一どかはって

金の星。

十八 お祭

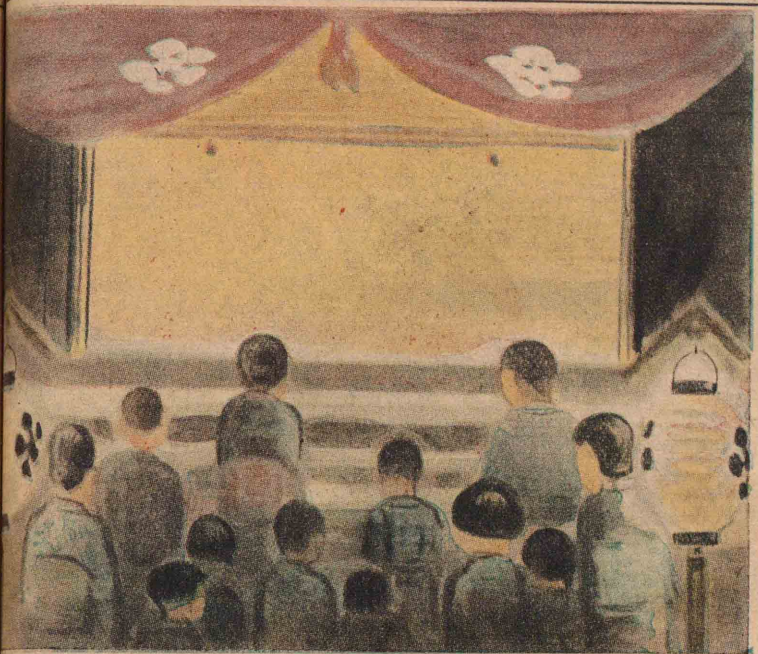
今夜は 天神さまの お祭 です。私は、弟の 一郎と
いっしょに、おかあさんについて おまわりをしに行
きました。

町は にぎやか でした。 ちやうちんの 火が、きれい
に 並んで みました。 新しい ゆかたを きた 人が、お
ほぜい 歩いて みました。

兩がはに 店が つづいて、 いろいろ なものを 賣つて
みました。 氷やと 金魚やが、 涼しさう でした。

お宮に 近くなると、 人が いっぱい でした。
おかあさんに 手を 引かれながら、 おされるやうに

して、はいでんの前へ出ました。



はいでんの前には、美しい
ちやうちんがありました。
た。大きな梅ばちのもん
がついてみました。

おかあさんも、私も、一郎
も、いっしょに拜みました。
かへりに、私は人形を
買っていただきました。

一郎は、おもちゃのたいこがほしいと、いって、それ
を買っていただきました。

一郎は大よろこびでした。うちへかへると、すぐ
たいこをなりました。おじぎをしたり、小さい手
をたたいたりしては、たいこをなりました。

十九 きりぎりす

私は、さつきから、せいより高くのびた草の中に、
じつと立ってゐます。ときどき吹いて来る風のた

めに、草の葉が氣持よくゆれます。

「チヨンギース。」

「あるぞ。」と思ひながら、私は、そつとこゑのする方へ、二足 三足 進みました。もう、二メートルとははなれて、ゐないやうです。私は、草の葉を一枚一枚かぞへるやうに、目でさがしました。

「チヨンギース。」

もう、ついそこです。しかし、いくらさがしても、そのすがたが見えません。

風がさつと吹いて、草が一どに動きました。すると、草の葉のうらに、ちらときりぎりすのすがたが見えました。

「みた。」

私は、手に持って、みた竹を、そつときりぎりすのゐる方へさし出しました。

葉のうらに、きりぎりすは、まだじつとしてゐるやうです。風がやむと、

「チヨンギース。」



と、いいこゑでまたなききました。

竹の先についてゐる白いねぎが、葉のそばにすれすれになると、きりぎりすは、ひよっこり動いて、葉の表へ出て來ました。

「うまく取れますやうに。」

心の中でいのりながら、ねぎを、きりぎりすのからだに近づけました。

すると、きりぎりすは、すばやく竹の先にのりうつつて、ねぎをおいしさうにたべはじめました。

「しめた。」と思ふと、むねがどきどきします。竹の先をそつと引きよせながら、虫かごの口へはこびました。きりぎりすは、びっくりしたやうに、かごの中ではねました。

私は、またほかのきりぎりすをさがさうと、草を

分けて 行きました。

二十 海

一 海へ 来て

おかあさん、私は、きのふをばさんと いっしょに、海へ行きました。

海は あまり 廣いので、びっくりしました。 水は まつさをです。 遠いところで、水と空が いっしょになつて みます。 白帆が、いくつも 浮かんで みます。

汽船も 通つて みます。

沖の方から、波が うねつて 来て、はまべで、 どつと 音を たてて くれます。 そのたびに、白い布をひろげたやうに、 ひろがります。



海は、いつも動いてゐます。海は、生きてゐると思ひました。

波うちぎはや 砂はまで、貝を見つけてきました。おさらのやうなのや、かたつむりのやうなのや、いろいろあります。その中で、つめのやうな形をした、つやつやとさくら色に光つてゐるのが、一ばんすきでした。私は 貝を たくさん ひろつて、かへりたいと思ひます。

二 砂の山

にいさんと ぼくが、手をつないで、海へはいりました。波が、ざぶん ざぶんとむねにあたりました。にいさんは、ぼくの手をはなして、深い方へおよいで行きました。ぼくは、まだ およげないので、浅いところで水をとばして遊びました。

何か 足に さはるので、つかんでみると、はまぐりでした。おかあさんに見せてあげると、

「まあ、めづらしい。いい おみやげができました。」とおっしゃいました。

それから、はまへの砂で山を
作りました。すると、波がだんだ
んよせて来て、せつかく作った
砂の山が、くづれだしました。

「まけるものか、まけるものか。」
どいひながら、砂をどんどんも
りあげました。にいさんもかせ
いしてくれました。

波は、あとからあとからよせて
来ます。ぼくらは、まけずにどん
どん砂をもりあげ
ました。

二十一 子馬

子馬よ、



おまへはかはいね。

おつむをそつとなでてあげませう。

からだは大きくても、

おまへはまだ赤ちゃんだね。

おかあさんのあとをおっかけて行って、

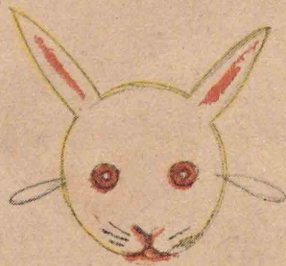
ときどき、おちちをさがすのでせう。

早く大きくなって、

りっぱな軍馬におなりなさい。

二十二 うさぎとたぬき

勇さんと太郎さんは、ぐわようしでめんを作って遊びました。



勇さんは、ぐわようしにうさぎの顔をかきました。耳を長くかきました。目を赤くぬりました。

太郎さんは、それを見て、



「ぼくはたぬきにしよう。」
 といって、たぬきの顔をかきました。鼻
 の両わきから耳へかけて、茶色にぬり
 ました。

二人は、はさみで糸を切りぬいて、めんを作り
 ました。

二人は、めんをつけました。

「さうだ、君、かちかち山ごっこをしようよ。」
 と、太郎さんがいひました。

それから二人は、あついで紙で、舟を二つ作りまし
 た。長いひもをつけて、首へかけると、舟はおなが
 のへんにかかります。

「うまい、うまい。うまくできた。さあ、ぼくはうさ
 ぎ、君はたぬきだよ。」

と、勇さんがいひました。

「ぼくがたぬきか。よし、やらう。」

うさぎの勇さんは、少し考へてからいひました。

「たぬき君、よい、お天気だね。これから、いっしょ

に舟遊びをしよう。」

たぬき「よからう。」

うさぎとたぬきは、舟を

こぎます。

うさぎは歌ひます。

うさぎ「うさぎの舟は、

木のお舟、

たぬきの舟は、

どろの舟。」

たぬきの舟が、少しおくれます。

たぬき「おうい、うさぎ君、ぼくの舟は、なんだか重くて

進まないやうだ。」

うさぎ「そんなことはないよ。君のこぎかたがへたな

のだ。」

たぬき「さうかね。」

またしばらくこぎます。たぬきはだんだんお

れます。

たぬき「やあ、たいへん、たいへん。ぼくの舟に、水がは



いつて来た。あ、舟が沈む、沈む。うさぎ君、助け
てくれ。」

いつのまにか、となりのへやに、勇さんのおかあさ
んとねえさんが、来て見ていらっしやいました。

勇さんも 太郎さんも 気が ついて、あわてて やめ
ました。おかあさんは、

「ほんたうに じゃうず ですわね。」

と いった、おほめになりました。

二十三 自動車

正男さんの うちへ 遊びに 行かうと思つて、外へ
出ました。

と中まで 来て、ふと 見ると、正男さんの 家の 前
に、自動車が 止つて みました。そばに、人が 四五人
立つて みました。

「なんだらう。」と思つて、私は 急いで 行つて 見まし
た。正男さんが みましたので、

「どうしたのです。」

と聞きますと、正男さんは、

「自動車のこしやう。」

といひました。

「どんなこしやう。」

と聞きますと、そばにゐたどこかのをぢさんが、

「あの、左がはの後の車をごらんなさい。」

といひました。

見ると、その車のタイヤが、ひしゃげてゐました。

「破れたのでせうか。」

と聞きますと、をぢさんは、

「タイヤの中のチューブに

あながあいて、空気がぬ

けてしまつたのです。」

といひました。

うんてんしゆは、その車を

はづしました。さうして、自

動車につけてあつたほか



の車を持って来て、とりつけました。

しごどがすむと、うんてんしゅはをぢさんたちに、

「お待ちどほさまでした。どうぞ、お乗りください。」

といひました。をぢさんたち三人は、

「やあ、ごくろうでした。」

と、いって、自動車に、乗りました。

うんてんしゅも乗りました。

「ブルブル、ブルブル。」

と、自動車が、うなりだしました。

をぢさんたちは、私たちに、

「さやうなら。」

といひました。私も正男さんも、

「さやうなら。」

といひました。

自動車は動きだしました。

「ブツ、ブウ。」

自動車は走って、行きます。

私たちは、自動車が見えなくなるまで、見て、みま

した。

二十四 長い道

どこまで行っても、

長い道。

夕日が赤い、

森の上。

どこまで行っても、

長い道。

ごうんとお寺の

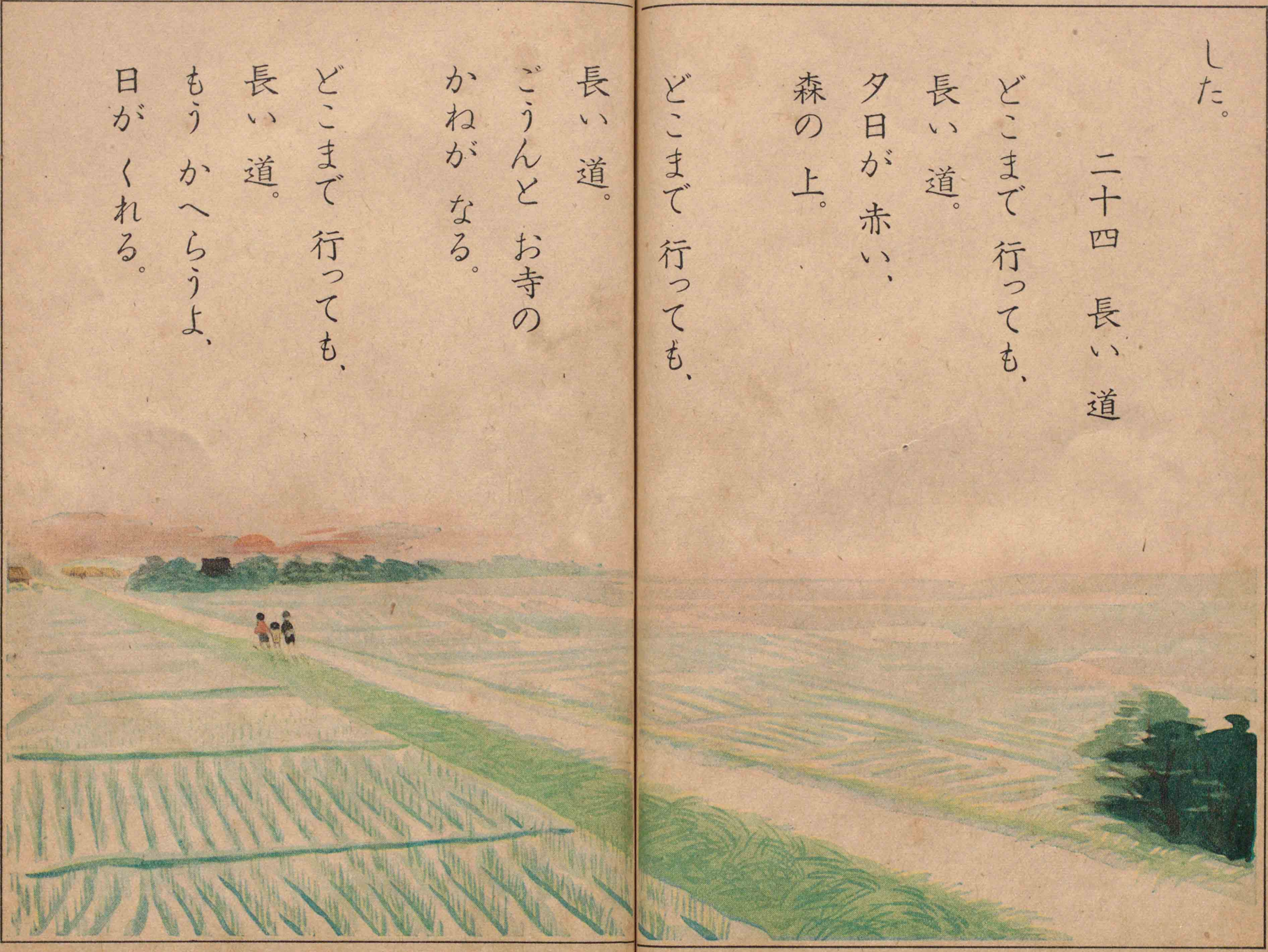
かねがなる。

どこまで行っても、

長い道。

もうかへらうよ、

日がくれる。



二十五 日曜日の朝

今日は日曜日で、こうあほうこう日です。朝早く起きて、にいさんと國旗を立てました。

私たちの立てた國旗が、風にひらひらして、いつもより勇ましく見えました。

みんな庭へ出て、宮城の方を拜みました。また、お國のためになくなられた兵たいさんや、戦地ではたらいていらつしやる兵たいさんのために、もくたうをいたしました。



それから、おとうさんのお手つだひをして、庭の草を取りました。

おとうさんが、枯れかかったかきねの朝顔を、きれいに取って、おしまひに、なったので、そのへんが見ちがへるやうに、明かるく、なりました。

にいさんは、こはれて、みたごみ箱のふたをなほ
しました。

おかあさんは、

「じゃうずにできたこと。」

と、いって、お喜びになりました。

「ごはんですよ。」

と呼ばれて、行ってみると、おかあさんは、赤ちゃんを
おんぶしたまま、もうすっかりおぜんのしたくを
して、いらっしゃいました。

「今朝は、一家そう動みんではたらいたね。」

と、おとうさんが、おはしを取りながら、おっしゃいま
した。

ごはんがすんでから、戦地の兵たいさんに、あもん
文をかきました。

二十六、うらしま太郎

一

四人の子どもが、一ぴきのかめをとりまいて遊んで
あます。

子ども一「このかめをころがしてみよう。」

子ども二「おもしろい。みんなでころがさうよ。」

みんな「よいしょ、よいしょ。」

かけごゑをかけながら、みんなでかめをころがします。
そこへうらしま太郎が來ます。

うらしま「これ、これ、どうしたのだ。」

子ども三「おもしろいから、かめをころがしてみるので
す。」

うらしま「そんなことをしてはいけない。かはいさう
だから、はなしてお
やり。」

子ども四「だって、ぼくたちが
つかまへたの
だも
の。」

うらしま「でも、かめは生きも
のだ。ゆるしてお
やり。

さうだ。私に、この



かめを賣つてくれないかね。」

みんな「賣つてあげよう。」

うらしまは、お金を子どもたちにやります。

子ども「よかった、よかった。」

みんな「行かう、行かう。」

子どもたちは、「わあ、わあ。」いひながら、行つてしまひます。

うらしま「かめさん、しつかりなさい。」

かめをだき起して、せなかをさすつてやります。かめは、なみだをふきながら、ていねいにおじぎをします。

うらしま「ちやうどここを通りかかつてよかった。早く

うちへかへりなさい。」

かめは、おじぎをしながら、どこかへ行きます。

二

うらしまがつりをしてゐます。そこへ、かめが出て來ます。

かめ「うらしまさん、うらしまさん。」

うらしま「おや、だれかと思つたら、この間のかめさんだね。」

かめ 「はい、この間は、お助けくださいまして、ほんたうにありがとうございました。今日は、お禮にりゅうぐうへおつれしようと思つて、まゐりました。」

うらしま 「りゅうぐうへ。」

かめ 「さやうでございます。それはそれは、きれいな、よいところでございます。」

うらしま 「それはおもしろい。行つてみませう。」

かめ 「では、ごあんないいたします。」

かめは、うらしまの手を取つて、そこらをつるづる歩き、

ます。

かめ 「ごらんささい。向かふに光つたやねが見えるでせう。」

うらしま 「ああ、見える。赤や、黄でぬつた門が見えるね。」

かめ 「あれが、りゅうぐうのご門でございます。もう、ちきでございます。」

三

かめが、うらしまをあんないしながら、出て來ます。

かめ 「ここが、りゅうぐうでございます。どうぞ、そこ」

へおかけください。」

うらしまは、あたりの美しさにおどろきながら、りっぱな
いすにこしをかけます。いろいろな魚が出て来ます。
その後から、おとひめさまがあらはれます。

かめ 「このおかたが、うらしまさんでございます。」

おとひめ 「あなたが、うらしまさんでいらつしゃいますか。
私は、おとひめでございます。この間は、かめ
をお助けくださいます。ありがとうございます。ございま
す。どうぞ、ゆつくり遊んでいってくださいま
せ。」

魚たちは、ごちそうをはこんで来ます。



おとひめ 「さあ、ごちそうりよなくめしあがつてください。
うらしま」 どうもごちそうさまでございます。」

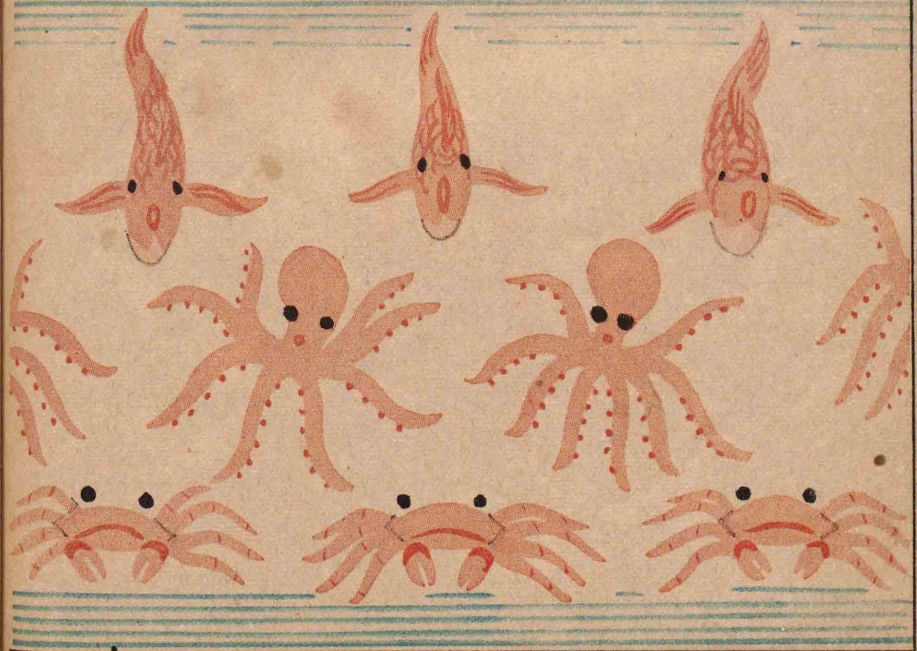
おとひめ「では、みんなにおもしろいをどりををどつてもらひませう。」

魚たちは、そろってをどります。

うらしま「おもしろい、おもしろい。」

四

かうして三年たちま



した。

ある日、うらしまは、父や母のことを思ひ出して、急に家へかへりたくなりました。

たひ「これは、まださしあげたことのない、おいしいごちそうでございます。」

うらしま「いや、もう十分いただきました。」

えび「では、にぎやかなをどりをして、ごらんに入れませう。」

うらしま「をどりもたくさんです。」

おとひめ「それでは、何かかはったことをして、おなぐさめ、いたしませう。」

うらしま「いや、おとひめさま、何もかも、もう十分でござい
います。長い間、ほんたうにおせわになりました。」

おとひめ「どうか なさいましたか。」

うらしま「あまり長くなりますので、もうおいとまいた
します。」

おとひめ「まあ、よろしいではございせんか。」

うらしま「でも、うちのことにも氣にかかりますから、かへ
らしていただきます。」

おとひめ「さやうでございますか。なんのおかまひもで
きませんでした。では、おみやげに玉手箱をさ
しあげませう。」

かめが、玉手箱を持って來ます。

うらしま「おみやげまで、いただきまして、ありがたうござ
います。」

おとひめ「この玉手箱は、どんなことがあつても、おあけ

になつてはなりません。いつまでも、そのままにしておいていただきたくございます。」



うらしま「よくわかりました。」

では、おいとまいたします。

さやうなら。」

みんな「さやうなら。」

かめ「私が、またおともをいたしませう。」

おとひめ「ごきげんよう、さやうなら。」

うらしま「さやうなら。」

かめが、うらしまの手を取って出て行きます。

五

生まれた村にかへったら、
だれも知らない人ばかり、
とはうにくれて、うらしまは、
あけて見ました、玉手箱。

白いけむりが立ちのぼり、

げんきで若いうらしまは、
みるみるしらがのおぢいさん、
昔むかしの話です。

父	破	波	宮	夏	寸	洗	答	切	白	玉	鳥
(107)	(89)	(75)	(67)	(58)	(51)	(40)	(29)	(22)	(16)	(10)	(4)
母	乘	布	拜	金	都	使	吸	右	女	南	野
(107)	(90)	(75)	(68)	(59)	(51)	(41)	(29)	(22)	(17)	(11)	(5)
道	砂	足	買	針	每	軍	左	並	北	美	
(92)	(76)	(70)	(59)	(51)	(41)	(31)	(22)	(17)	(11)	(5)	
寺	貝	進	兩	鼻	夜	雄	流	歌	國	茶	
(93)	(76)	(70)	(61)	(54)	(42)	(31)	(23)	(17)	(12)	(5)	
曜	深	枚	涼	高	忘	知	葉	鯉	引	原	
(94)	(77)	(70)	(63)	(55)	(42)	(32)	(24)	(18)	(12)	(8)	
起	淺	表	浮	強	若	城	作	矢	昔	向	
(94)	(77)	(72)	(63)	(56)	(43)	(32)	(24)	(18)	(13)	(8)	
戰	顏	心	沈	梅	首	砲	岸	尾	神	力	
(94)	(81)	(73)	(63)	(57)	(43)	(33)	(25)	(18)	(13)	(8)	
枯	耳	虫	星	實	逃	形	止	待	廣	開	
(95)	(81)	(73)	(66)	(57)	(43)	(33)	(26)	(20)	(13)	(8)	
箱	紙	分	祭	黃	家	魚	近	用	地	落	
(96)	(83)	(74)	(66)	(57)	(45)	(35)	(26)	(20)	(13)	(8)	
喜	助	帆	町	色	遠	旗	蛙	千	動	同	
(96)	(86)	(74)	(67)	(57)	(46)	(37)	(27)	(21)	(14)	(8)	
文	自	船	步	田	谷	痛	遊	百	橋	重	
(97)	(87)	(75)	(67)	(57)	(48)	(39)	(27)	(21)	(16)	(9)	
禮	後	沖	賣	苗	根	苦	聞	取	明	何	
(102)	(88)	(75)	(67)	(57)	(49)	(39)	(28)	(21)	(16)	(9)	

昭和十六年三月八日
文部省檢査日



發行所

著作權所有

昭和十六年三月五日 印刷
昭和十六年三月七日 發行
昭和十六年三月廿一日 翻刻發行

著者兼發行

文部省

定價金拾九錢

よみかた三

翻刻發行

代表者 井上源之丞

印刷所

東京書籍株式會社工場

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地

東京書籍株式會社

上野明弘